

# 国際高麗学会主催「統一を志向する哲学」

## 参 加 報 告

金 哲 雄

国際高麗学会（1990年8月に発足、事務局は大阪経済法科大学内）主催の学術討論会・第2回「統一を志向する哲学」は、1994年2月21日、22日の2日間、昨年8月に開かれた第1回「統一を志向する言語と哲学」の成果を踏まえて、中国・北京の建国飯店で開催された。参加者は大韓民国から10名、朝鮮民主主義人民共和国から4名、中国から崔応九・北京大学教授（国際高麗学会会長）をはじめ5名、アメリカから2名、日本から呉清達・大阪経済法科大学副学長（国際高麗学会副会長）など6名の合計27名であった。本討論会は、南北朝鮮、および海外からの研究者による専門者会議であった。

本学術討論会は、各報告にたいして各コメントがなされた後に質疑応答を行うという形式で進められ、共通言語として朝鮮語が使用された。討論会の報告者及びテーマは次のとおりである。なお、全体討論の司会は、金哲央・朝鮮大学校教授（国際高麗学会哲学・宗教部会委員長）が担当した。

22日 午前

- (1) 金永斗（韓国・圓光大学校教授）

圓仏教の相生哲学と統一観

- (2) 呉享根（韓国・東国大学校教授）

民族の共同體意識と和諍思想

- (3) 宋基得（韓国・牧園大学校教授）

南韓のキリスト教神学は同胞の統一のために何ができるだろうか

22日 午後

- (4) 朴承德（朝鮮・民族問題研究会会長、教授）

チュチェ的民族観と祖国統一の当面問題

- (5) 金京振（中国・中央民族大学副教授）

朝鮮近代宗教の圓融観念の統一観

- (6) 金道宗（韓国・圓光大学校教授）

生産様式の変動と文化的生産力

- (7) 李天洙（朝鮮・元山農業大学教授）

全民族大団結は我が民族救援の正しい道

23日 午前

- (8) 崔龍水（中国・中共中央学校教授）

歴史哲学の角度から見る朝鮮統一

- (9) 金哲央（日本・朝鮮大学校教授）

理気論から見た東学思想とその人間観

- (10) 姜・ミョン Chol（朝鮮・人民大学習堂副教授）

祖国統一と人民大衆の主導的役割

- (11) 盧泰久（韓国・京畿大学校教授）

天道教の平和観－造化思想と関連して

23日 午後

全体討論（司会：金哲央教授）

以上のように本学術討論会では、仏教に関して3編、チュチェ思想に関して3編、東学思想（天道教）に関して2編、キリスト教、朝鮮近代宗教、歴史哲学に関して各々1編ずつの計11編の論文が報告された。そのうち、南からの報告が仏教、天道教、キリスト教といった宗教関係の論文であったのに対して、北からの報告はチュチェ思想に基づいた論文であったことが特徴として挙げられる。そして、全報告をつうじての際だった論点は、自己の専攻分野からどのように「統一を志向する哲学」として役割を果たすことができるかというものであった。

ここでは、南からは金永斗「圓仏教の相生哲学と統一観」、宋基得「南韓のキリスト教神学は同胞の統一のために何ができるだろうか」、北からは代表論

文としての朴承徳「チュチェ的民族観と祖国統一の当面問題」について主要内容を少し詳細に紹介し、他の論文を含めた全報告についての感想を述べてみたい。

金永斗論文は、Ⅰ「はじめに」、Ⅱ「東洋の五行思想」、Ⅲ「圓仏教の相生哲学」、Ⅳ「圓仏教の統一観」、という体系で構成されている。

Ⅰ「はじめに」では、20世期末の世紀末的危機として、環境破壊による生体系の危機と戦争の危険を挙げ、とくに韓半島の場合はこのような可能性が最も多い地域だと指摘している。

Ⅱ「東洋の五行思想」では、このような危機を五行（水、火、金、木、土）から説明すれば、相克（水は火を克し、火は金を克する関係）の状態と規定し、この問題を解決するにおいて相生（水は木を助け、木は水を助ける関係）の哲学は多くの示唆を与えてくれていると主張する。

Ⅲ「圓仏教の相生哲学」では、相生哲学は、第1は「恩」の思想であり、第2は「転じよう」の思想であり、第3は強者弱者の進化上の思想であると見る。すなわち、第1には、天地恩、父母恩、同胞恩、法律恩の四恩であること。第2には、「日常遂行の療法」で「怨望生活を感謝生活に転じよう」、「他力生活を自力生活に転じよう」、「学ぶことの知らない人を学ぶ人に転じよう」などであること。第3に、その方法として「自力養成」、「智者本位」、「他子女教育」、「公道者崇拜」の「四要」が提示されているのである。

Ⅳ「圓仏教の統一観」では、韓半島が依然として理念的対立とともに対峙状況の下で、相生することのできる統一の準備作業が至急に要求され、思想的分野の同一性の回復が統一以降でも必要な作業であると考えられている。この作業とは圓仏教と北韓のチュチェ思想との類似点と相違点を分析することであり、このなかでも相互間の類似点に優先的に注目することが一つの方法と見る。金永斗教授が考える類似した側面は次のとおりである。

すなわち、第1には、圓仏教の教団の成長過程が民族資本で運営されて来た点。第2には、圓仏教が韓国で始まった点。第3には、圓仏教信仰の真理的性格が、キリスト教の「イエス」とか、イスラム教の「アラー」のような神的対象を設定せずに、一圓相という丸い圓（0）を奉ることにある点。第4には、

物質改革を承認する点。第5には、利他的な心性を涵養できる道徳的修練を重視する点。第6には、「四要」のなかで「公道者崇拜」は指導者の役割を重視する点である。

このような側面から見ると、圓仏教から提示し得る統一観は恩思想と相生哲学に基づいた調和と共生志向の統一観だといえることができるし、これは統一祖国を目指し得るものと見ている。

宋基得論文は、三つの体系（1「キリスト教神学」、2「民衆神学」、3「人間化の志向」、「結び」一筆者）から構成されている。

1「キリスト教神学」では、キリスト教が人間の救援を第1とし、わが同胞の具体的な救援が統一以外に考えられないとしている。そして、宋基得教授は、キリスト神学が統一に参加するにおいて次の二つを指摘する。すなわち、第1は、南韓のキリスト神学が統一のための神学として実体を確保することであり、第2は、南韓のキリスト神学が北韓の理念と意を同じにすることのできるパターンを探ることである。

2「民衆神学」では、聖書の資料を見ればイエスはその言葉と行動を通じて民衆解放を志した事実を知ることができるとして、この事実を今日の歴史的状況において復言しようとするのが南韓の民衆神学であると規定する。そして、今日のキリストは民衆自身であり、民衆解放運動に自ら参与してそれを成し遂げていく人を指している。一方、民族解放運動の目標は民衆が人間らしく生活できる人間化の実現にあると見る。ところで、最も基本となる悪の実体は南北の分断であるとし、統一の主体がわが同胞であると主張する。このようにして、統一を志向する南韓のキリスト教神学は、民衆神学であると同時に、民族神学または統一神学が互いに連帯して統一の柱にならなければならないし、またなっているとする。これがキリスト教が南韓において自己の実体性を確保する道だ、というのである。

3「人間化の志向」では、南と北が一つになろうとすれば思想、理念が同じでなければならない、それを「人間化の志向」において探したいとしている。そして、人間化は統一の目的であり、統一は人間化の手段である、と規定する。ところで、南韓において人間化の理念を強調するのが「民衆思想」の一つであ

る民衆神学である、というのである。ところで、宋基得教授は、チュチェ思想と民衆神学とが会うことのできる場が民衆（人民）意識とともに、経済理念においてではないかと指摘する。すなわち、キリスト教共同体の経済実践は「能力に応じて働き必要に応じて受け取る」にあったとする。この経済原理はどこまでもイデオロギーを超えた人間化の実現という意味において純粋性をもつと見る。

「結び」では、南韓のキリスト神学が、第1に民衆神学〔民族神学・統一神学〕においてその実体を確保することによって統一に参与し、第2に「能力に応じて働き必要に応じて受け取る」という経済秩序により人間化を実現することによって、南と北が意を同じくして統一を成し遂げるために対話・協力していかなければならない、と主張する。この期間、南韓のキリスト教は北韓の教会と合意して1995年を統一の「稀年」として宣布し、「民族の統一と平和に対する韓国キリスト教の宣言」を発表して北韓の教会の代表たちと熟議してきたという。

朴承德論文は、次のような体系で構成されている。「はじめに」、Ⅰ「チュチェ思想の民族観」（1「民族は自主性を生命とする集団的生命体」、2「民族の特出した地位と役割」）、Ⅱ「祖国統一の当面問題」（1「連邦国家案と国家連合案」、2「民族的統一と制度上の統一」）。

「はじめに」では、朴承德教授は、この度の集いがわが民族の統一と将来に対する北南学者たちの見解を接近させ、民族の団結と団合のための共通した基礎を確認する立派な機会になると信じる、と力説する。

Ⅰ「チュチェ思想の民族観」では、チュチェ的民族観には民族を優先視する立場が貫徹されているし、民族の生命という真理が科学的に明らかにされており、社会的集団のなかで民族が占める特出した地位と歴史創造活動において民族が果たすきわめて大きな役割が創造的に解明されていると説明する。

1「民族は自主性を生命とする集団的生命体」では、民族は階級、人民大衆、人類と区別する独自の社会的生命体であり、民族の社会的生命は自主性であるという。そして、民族の自主性は次の二つの内容をもって指し摘する。すなわち、一つは他の民族に隷属するとか、同化することに反対し、自己の運

命の主人としての権利を擁護し行使すること、他の一つは、他の民族の力に依存することに反対し、自己の運命の開拓者としての責任と役割を果たすことである。また、民族は集団的生命体であり、民族の集団的生命体は民族の成員が保持している個人的生命の母体であるとする。このように自主性を生命とする集団的生命体として、民族を把握するチュチェ的理解から祖国統一を民族至上の切迫した課題とみる観点が生まれてくる、というのである。

2「民族の特出した地位と役割」では、民族は最も強固で階級に比べて優位を占める社会的集団としての地位を占めていると主張しながら、次のように規定する。すなわち、第1に、民族は、自己の同一性を絶えず維持・保存する最も強固な集団であり、第2に、その存在の持続性が長く最も生活力がある集団であり、第3に、階級的利益の実現を規制する集団である。また、このように民族は社会的集団のなかで特出した地位を占めるだけではなく、社会発展と歴史創造活動においてきわめて大きな役割、すなわち、人々の社会生活が営まれる基本単位としての役割、歴史が創造される基本単位としての役割を果たすと主張する。このような民族の特出した地位と役割に対するチュチェ思想の見解から、階級に比べて民族を優先視し優位に置く観点と立場が生まれてくる、という。

II「祖国統一の当面問題」では、朴承德教授は、祖国統一方途に対する北南学界の共同認識を確立するにおいてきわめて重要だと考える二つの問題、すなわち連邦国家案と国家連合案問題と、民族的統一と制度上の統一問題について言及しようとする。

1「連邦国家案と国家連合案」では、連邦国家案と国家連合案との相違点を四つに整理することができるとする。すなわち、第1に連邦国家案においては一つの統一的国家が存在するが、国家連合案においては二つあるいはそれ以上の独立的実体が存在する点であり、第2に連邦国家案においては統一国家が唯一の国際法的主体になるが、国家連合案においては包括される国家がそれぞれ国際法的代表性をもつようになる点、第3に連邦国家案においては国家水準の統一的な中央政府が形成されるが、国家連合案においては包括される国家が一定の目的のために設置する協議調整機構があるだけである点、第4に連邦国家

案においては地方政府に対する中央政府の権能が大きい、国家連合案においては中央的政治組織の機能が弱い点である。

このような相違を念頭におくと、わが国の現状において、民族の自主性を擁護・実現するにおいて連邦国家を創立することがより合理的で現実的であると考えている。

2「民族的統一と制度上の統一」では、民族的統一は民族的同一性と単一性に基づいた祖国の統一であり、制度上の統一は一つの政治制度、経済制度、文化制度に基づいて階級的社會制度を単一化する事業であると規定し、両者は互いに区分されながらも一定の関連をもっている、と次のように指摘する。まず第1に、民族的統一は単一の民族國家の創立に基づいて民族の二分を克服する事業であり、制度上の統一は民族の二分を内部的に固着させた互いに違った階級的體系と機構を単一化する事業であるがゆえに、共に民族のなかの分裂、葛藤、対立を克服する事業として関連している。次に、民族的統一は分裂に反対し統一を志向する人民の宿願を民族的水準において実現する事業であり、制度上の統一はそれを階級的水準において実現する事業であるがゆえに、共に発展した統一へと志向する人民の念願を実現しようとする事業として関連しているのである。

そして、北南学者相互に制度上の統一を実現するための目的と方法、時期に対する共同認識を確立することが必要であるとし、どこまでも民族的な立場から出発して民族全体の自主性とすべての民族成員の自主性をよりよく実現できる社會制度を選択するところに、制度上の統一を実現するための目的をおかなければならないと主張する。

以上のように金永斗「圓仏教の相生哲学と統一観」、宋基得「南韓のキリスト教神学は同胞の統一のために何ができるだろうか」、朴承德「チュチュ的民族観と祖国統一の当面問題」は、圓仏教、キリスト教神学、チュチュ的民族観からそれぞれ朝鮮の統一をどのように志向することができるのか、という見解を示したものである。

金永斗教授の見解は、圓仏教（1916年に全羅北道益山郡で開宗された仏教教派の一つ）とチュチュ思想との六つの類似点を優先的に注目し、恩思想と相生

哲学に基づいた調和と共生志向の統一観が統一朝鮮を目指し得る、とする重要な見解であった。また、宋基得教授の見解も、キリスト教神学が統一に参与するためには第1に民衆神学にその実体を確保すること、第2に「能力に応じて働き必要に応じて受け取る」という「人間化の志向」によって南のキリスト神学と北のチュチェ思想が意を同じくして対話・協力していかなければならないとするもので、その実践活動も含めて注目すべき見解であるといえる。朴承徳教授は、チュチェ的民族観には民族を優先視する立場が貫徹されているとし、朝鮮の統一方途に対するきわめて重要である連邦国家案と国家連合案、民族的統一と制度上の統一について力説した。この見解は、民族的立場から出発して民族全体の自主性を実現できる社会制度を選択する、という重要な問題を提案したものであった。

これらの3編の論文と同様に、他の論文も自己の専門分野から朝鮮の統一のためにどのようにアプローチできるかというものであった。そして、互いに立場が異なるにしても、統一に貢献しようという一点で充実した学問的な論争が展開されたのである。第2回「統一を志向する哲学」が朝鮮の統一に対する南北の研究者の見解を接近させるうえで大きな契機になったことは間違いないだろう。ただ、仏教、キリスト教などの内容について南北相互間でより突っ込んだ議論がなされておれば、一層充実したものになったと思われる。

今日でも、専攻分野を同じにする南北朝鮮の研究者が一堂に会することがきわめて数少ない状況のなかにある。この点からして、2回にわたって、哲学・宗教を専攻する南北朝鮮の研究者を中心に朝鮮の統一について論議を交わしたことは画期的なことであるといえる。第3回「統一を志向する哲学」が大いに期待されるところである。

#### 〈付記〉

本報告における北韓、北南学者などの表記は、論文報告者自身の表記に従っている。